

JICA集団研修による国際貢献

30年間の歴史を振り返る



企画部広報普及課 山越 守

防災科研と JICA 集団研修

防災科研における最初の JICA 集団研修は、1977年に実施されました。この研修は「防災技術セミナー」という名称で1977年から1996年までの20年間毎年実施され、42カ国から総計194名を受け入れました。1978年に、防災科研の前身である「国立防災科学技術センター」が東京からつくばへ移転していることから、新鮮な環境で集団研修が始まった様子が想像できます。当時の資料を見ると、JICA はもちろん国、地方公共団体、大学および研究機関など多くの関係機関にも大変ご協力いただいた上で「自然災害全般にわたる講義」を中心とした研修が行われていたことがわかります。

一方、1999年から隔年で5回実施した「自然災害防災研究」コースでは、13カ国から総計27名を研修生として受け入れています。こちらの研修は、前述の「講義」中心と異なり、研修生が個別の研究テーマを選び、受入研究者の研究室などを拠点として研修を実施した点が大きく異なっていました。

千差万別な研修生

JICA 集団研修との個人的な関わりは、国際関係の事務業務にはじめて携わった2001年度に遡り、合計4回の JICA 集団研修に関する事務を担当させていただきました。この間に多くの研修と研修生を見る機会をいただき、いくつ

か驚くような出来事も目にしました。

ひとつは、研修生のレベルの違いです。募集の際に一定の基準を設けてはいるのですが、さまざまな国のいろいろな立場の方が集まることから本当に人それぞれでした。研修というより共同研究の相手のような方もいれば、PCの操作からはじまり研修のほとんどについて受け入れ研究者が世話をしなければならないというようなケースもありました。

また、研修に対する取り組み方もそれぞれで、「3ヶ月しかないのは短すぎる」といって JICA の宿泊施設へ帰って更に学ぶ人もいれば、1週間で十分という感じで帰国する日を指折り数えている人、JICA から支給される日当をとことん節約し自国の家族へ送金する方など、まさしく千差万別でした。

更に話では聞いていましたが、食文化の違いや宗教の違いなどを間近で見ることができました。これら異なる文化や環境なども踏まえた上で、国際的な協力活動が成り立っているということを実感しました。

JICA 集団研修による主な成果

近年の中では、本特集でも紹介されているエクアドルにおける火山災害軽減に関する協力やインドネシアを中心とした国際地震観測に関する協力を挙げる事が出来ます。また、アルジェリアの研修生受け入れをきっかけに、アルジェリアにおける耐震実験施設の建設に貢献してい

る例などもあります。

いずれも研修生が帰国した後も、何らかのかたちで繋がりが継続しているものです。このように、JICA と協力して行ってきた集団研修により、いくつか国際貢献の良い例を生み出してきました。研修に携わった者として、研修が他国の役に立っているという話を聞くことは大変嬉しいことです。

今後の国際活動

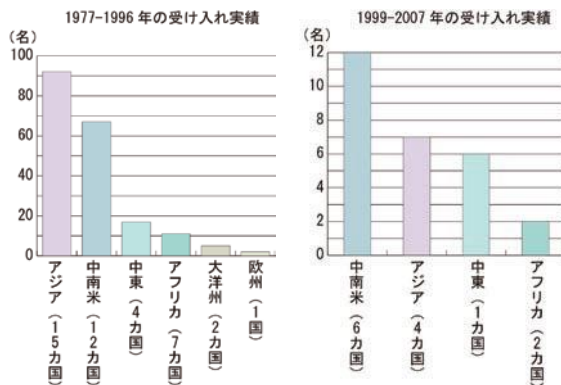
このように、成果を出してきた JICA 集団研修ですが、さまざまな事情により2007年度の研修終了後に一旦休止し、所内で今後の活動について検討していくことになりました。

「防災科学技術は、日本が誇る優良な輸出物のひとつである」という発言を聞いたことがあります。まったく、その通りであると私も思います。

ご存知のとおり日本では多くの自然災害が発生することから、世界でもトップクラスの防災に関する研究開発が行われています。これらの研究開発による知識を多くの国々と共有し国際貢献を行っていくことは、日本における国際的な役割のひとつであると思います。

防災科研においても、防災分野における国際活動は大変重要なものであるという認識の下、国際展開を基本目標の1つに位置づけています。

そこで、1977年から実施した JICA 集団研修などにより積み上げてきた経験を活かし、研修以外の活動も含め相手国にとって有益となる国際協力を行っていくことが出来るよう、今後も検討を行い実施していく予定です。



受け入れ人数上位3国

- ・ペルー 21名
- ・インドネシア 20名
- ・フィリピン 20名

図1 研修生の受け入れ実績 (1977-2007)



写真1 閉講式における集合写真 (2007年度)



写真2 “人と防災未来センター”において、阪神・淡路大震災の経験談を聞く研修生 (2006年度)